

刻竹夜の原の朝の露と消え給ふ、若の言葉に如何に安千代、未だ此世に有るかなさか、と問ひ給へば、答ふるものは竹の夜原の原鬮き、磯打つ波に空飛鳥の羽音計りにて、いと哀れは増さうける、若君も次第く哀えて、七日に當る扱ても午の刻、竹の夜原の朝の露と消へにける、中々物の哀れなり、十八人の士は、皆一同に肥前屋形に亂れ入らんと思へども、多勢に小勢のことなれば、力に及ばず、皆はたの板下に立寄りて、思ひく、清く自害を致しける、何より物の哀れなり、頓て此由降信殿聞召れ、姫に付きたる六人の女房達を御出に召され、何に其方達は、是れより暇取する、何國の里にも落ち行きて、思ひく、に身を雪げよと御意下る、勝の前進で申す様、嗚呼情なき降信様の御説かな、某二十歳より御乳を上げにし、姫君さへも御助なきに、數ならぬ我々共に御暇給はるとも、國に歸りて如何せん、思ひく、

に清く自害をとげにける、未だ惜ふる歳は、勝の前が二十七、萬勝の前が二十五、千勝の前が二十一、小宰相が二十、小櫻が十九、小相が十六、何れも劣らぬ花さかり、夜半の嵐に誘はれて、散つて行くこそ哀れなり、頓て、此由、割府御所へ、洩れ聞え、赤星殿聞し召され、扱は中々、是は又夢が現か、幻か、夢ならば、覺てもゆけ、現ならば消へてもゆけ、幻ならば暫しが程は、松の葉色に留まれか、しと、天にあをのき地に伏して、歎かれ給ふぞ、哀れなる、割府の御所は、寺々の鐘の音に留りて、長夜の響と泣暮す、是は扱て置き、爰に又、肥前に於てつれなき士、隈部、添島、鍋島、田尻の人々は、此序に赤星が領分を知行にせんと、我が手三千余騎を引き具して、割府の御所を指して急がる、頓て割府にも成ぬれば、彼御所を二重三重に取りかこみ、時の聲をぞ揚げにける、赤星は此由御覽なされ、扱は中々、兄弟の子供を無慘に殺され、歎かせ給

ふ折節敵に攻められて、大刀も揚からぬ次第なり、もふは力に及ばず、彼御所に火を掛け、天も霞も焼き立てる、佳馴れし割府の御所を袖白雪と振捨て、八代指して落ちんとし給ふ所を、跡より敵は鬨の聲を揚げ、しげくしとふて追ひ、懸る、是は扱置き爰に又赤星の郎等に上村兵部左衛門、大剛の勇士あり、此の由見るより、主を討せては叶ふまじと、我手三百餘騎にて、門外さして切て出れば、肥前方大勢にをろし合せ、如何に旁々某を如何なる者とや思ふらん、赤星が郎等、上村兵部左衛門とは某なり、手並の程を人々見給へと、言ふより早く三尺八寸の、大太刀を抜き持て、大勢の中に面も振らず割て入る、追ひつ追れつ請けつ流しつ、三度の太刀打、四度の追ひ込み、五度の戦六度の合戦、七八度目には鎧を削り、鐙を割り、切羽の金もみぢんになれと、世にも烈しく、此所を先度と戦ひしが、痛はしや向ふ敵八百餘

騎は、只やみくくと討れける、我手も三百餘騎は、つまりくりに討死す、今一太刀と思へども、多勢に無勢の事なれば、力に及ばず、少高き所に走上り、腹十文字にかき破り、清く自害をしたりける、未だ惜かる年は二十八、傷まん人こそなかりける、赤星殿は、此隙に八代さして落給ふ、八代の慈眼寺、正法寺、彼の兩寺を深く頼ませ給ひて、三年の程は終夜百万遍を唱へて、月日を送りておはします』

二 段

去程に赤星斯くて三年も過ぎ行けば、赤星殿は徳の口より夜船に召れ、薩摩を頼みに下らせ玉ふ、順風善ければ帆を上げて、程なく出水米の津に着かせ給ふ、其の頃の米津は、島津義虎公の御持なれば、直に義虎公の御前に

參り、如何に申さむ某は、肥後にて割府の城主、赤星源次郎綱明と申者也、肥前に於てつれなき士、隈部左馬之助親興と云へる者の、讒言に依り、隆信殿より、兄弟の子供を、無慘に殺され、其の上敵に賣られて、未だ太刀も上らぬ次第なり、漸々是迄參り候也、何卒肥前に一度弓を引て給はれ、義虎様とありければ、義虎公聞召れ、扱は中々、世にも無慘の事を聞く次第かな、其儀ならば是れより北に當りて、大口と云へる在所に、新納武藏守忠元、迎弓取一人おはします、彼を深く頼ませ給へと、案内者二人連れ給ひ、早や米の津を御立なされ、夫婦打連れ、髪は月日に晒されて、裾は露袖は涙に打しめり、つくつくと、吳竹の世は、逆様に杖をつき、嗚呼兄弟の子供の事がいや増さる、音に聞えし高はな越を軽く召れ、急がせ給へば程もなく、菱川表大口に成りぬれば、直に新納武藏守殿へ對面有て、斯の次第を申させ給ひければ、武

藏殿聞召れ、偕は中々無慘な事を聞く次第かな、其儀ならば是より東に當りて、佐土原と云へる所に、島津中務太輔家久公、迎軍奉行のをはします、彼を深く御頼みなされ、左もあらば數ならぬ武藏も、島津の御馬の先にまかり立ん、案内者二人召し連れ、早大口を御立なされ、音に聞へし般若寺越を軽く召れ、真崎五ヶ所を打通り、白飛山を伏拜み、野尻紙屋を過ぎ行て、急がせ給へば程もなく、日州佐土原に着かせ給ふ、直に中務殿の御前に參り、赤星が斯の次第を殘らず、申させ給ひ、何卒肥前に弓を引て給はれ、中務様と、涙と共に頼みたれば、家久公此由聞召れ、是は以ての外、仰せかな、當國は赤星殿とは、矢崎合戰の折、大敵肥前は、味方なり、其の儀無用と仰せける、赤星は是非に及ばず、涙と共に、中務殿の御前を立せ給ふ、爰に又中務殿の御嫡子に、又七殿とて、今十三殿にならせ給ふが、赤星を哀れと聞召、直に父中

務殿の御前に参り、いかに申さん。父上様國主が國主を頼むは世にある習ひ。譬へ大敵なりとも人窮すれば元にかへる鳥窮すれば懐に入るとかや。夫れ武士の習ひにて。昨日の敵も今日は味方。今日の味方も明日は敵。何卒御加勢有て給れかし。左もあれば某も御供仕り。御馬の先にて高名致さんと。勇み進んで有れば。中務殿聞し召され。又七殿の勇氣を感じ其儀ならば。赤星を呼びかへし給へば。赤星斜に喜び直に中務殿の御前に参られける。頓て中務殿御説に、いかに申さん。赤星殿當國は島津義久の余地なれば。某とても議定返事は致されぬ。兎も角も義久公に御意を伺ひ、弓を引かては叶ふまじと有りければ。悦び給ふこと限りなし。夫れより佐土原小路く。に島原責めと觸を廻せば。我もくと進む士七百余騎とぞ聞えける。嫡子又七殿三百余騎。御父子共に千餘騎にて。早佐土原を御立ちなされ。急がせ

給へば。世は何事も勝目の坂を打過ぎて。早高岡を馳せ通り。去川になりぬれば。死出三途の川と打渡り。今日もまだ日は高城と打通り。最早庄内都の城に着かせ給ひ。竹の下なる一夜の笹陣召れける。直に其夜は北郷一雲殿へ御内談召れしが。心得たりと觸狀を廻され給へば。先一番に小杉土持。北郷民部左衛門を初めとし。都合其勢一千余騎にて。早や都の城を。未だ夜深くも御立なされ。元服の渡りを三重町過ぐれば。眞幸の峯を越へ。人の中なる本路原。六道坂をも打過ぎて。心安くも通り山。牧の原をも下らせ給へば。早や福山の宮が浦にぞ着かせ給ふ。直に宮が浦々に。兵船二十余艘を催し。宮が浦より御舟に召れ。先一番に弓手に見えしは。櫻島。妻手に見えしは。源氏の内神正八幡を伏し拜み。捨て置かれん濱の市。七里小濱や長濱の。加治木の里を詠れば。實にや名高き蛇王岳。龍は住ねど黒川や。爰は脇元別府川

や、龍が水をも跡に見て、三船の明神伏し拜み、暫しは此所に浮ひ舟、浦吹く風に帆を揚て、順風よければ早、鹿兒島の春日の町に着かせ給ふ、中務殿は直に屋形に参り、赤星が斯くの次第を御申あれば、義久公聞召れ、備は中々赤星は、弓矢に取りては大敵なれ共、國主が國に落ちて主を頼むは、世に有る習ひ、兎にも角にも弓を引かては叶ふまじ、去れど又軍は、勢の多少によらず、大將の運によるべし、此度の大將島津中務父子と御意下る、中務殿は直に御前を罷り出て、鹿兒島小路に、肥前島原責と觸れ廻され給へば、我もくと進む士、一番に島津中務殿御父子、同苗輝久、北郷樺山、鎌田寛政、新内忠元、伊集院久治、吉利、吉田、加治木彈正、頼姓、佐多、島津圖書頭忠長、彌寝重武、喜入、肝付入来院、桂、梅北、敷根、比志島、弟子丸、宮里、野村の何某、町田出羽守、中にも川田駿河守、川上左京久堅、稻留左京、猿渡右京、出水方には島津義

虎公、同名伯耆守、水谷、植村、大橋、平田、和州、村田、狩野介、彼方くとを先として、都合其勢一萬三千餘騎は、唯やみくと馳せ集り、吉日を撰ばれ、鹿兒島御立なされ、旗差物を朝日に輝せ、勇々敷ぞ見へにけり、鶴丸山を跡になし、音に聞へし水上坂を軽く召れ、腰は掛ねど横井原、間遙の五本松、君の心は實に清藤涼み松、伊集院六郎坂をも打過ぎて、城はなけれど城の町、急がせ給へば程もなく、市來の港に着かせ玉ふ、一夜の宿陣召されける、大隅薩摩は遠國なれば、肥後に合する旗が二十四本と聞えける、明けしかば市來の港を御立ちなされ、世に何事も勝目の橋をも打ち渡り、華の五反田打過ぎて、薩摩山を二度と歸りぬ、死出の山を打通り、佛の前にはあらねども、佛生橋をも打渡り、敵に向ふ田川内川を三途の大川と打渡り、新田八幡宮へ御参詣成され、此度貪欲無道の隆信を、何卒討たせ給はれと、深く御祈願召され

ける、早や川内を御立成され、夕日に向ふ暮様や、五月半の麥の浦、高城の小路を打過ぎ、西方、阿久根を馳せ通り、急がせ給へば程もなく、出水青屋に着かせ給ふ、義虎公の旗揃へ、米の津へ三日が間は、軍の評議召れける、斯くて三日も過ぎ行けば、家久公の御馬は、徳の口へぞ廻さるゝ、兵船三百餘隻を一ツに押寄せ、矢筈が岳より吹き下ろす、嵐と俱に船出す、名所奮跡、浦々ながめて面白や、先一番に、夕部生れて、今朝早見えてし物は、はらび島、君の御運は強き命長島、敵の爲めには獅子の島、瀬崎、笠山、三日月山をも跡に見て、駒は立ねど、牧の島、寝亂れ髪のかつら、崎、笛と太鼓はなけれども、神樂崎をも漕ぎ通り、君はなけれど、御所の浦、時に渡せば、今浦本浦、唐木崎、境ひ二又、そろを崎、柳の瀬戸も跡に見て、今日の日も早や暮羽島、一夜の宿をからう島、夜はほのく、とあこうささ、駕は住ねど、池の浦、名残惜しくも、姫の浦、三

角の瀬戸を漕ぎ出て見れば、早や先手は島原の安徳寺に陣を取り、是は借置爰に又、鎌田寛政、新納忠元、吉利、吉田、彼の人々は薩摩に於て、物になれたる武士なれば、天草島に打渡り、島衆五六人からめ取り、案内者として島原陣にぞ渡さるゝ、中務殿は此由聞召れ、大いに悦び、最早軍の手當召れける、先一番に、鎌田寛政、新納忠元、伊集院久治、吉利、吉田、彼の人々は一千五百餘騎にて、濱の出口の手當なり、稻留左京、猿渡肥前守、一千五百餘騎にて、水の出口の手當なり、加治木彈正三千餘騎にて、大手の口に控へ給ふ、島津中務殿御父子、川上左京久堅、彼の人々は二千餘騎にて、桑原の陣に籠り給ふ、平田和州、村田狩野介は残りの勢を引き連れて、島原口をしかと堅め、肥前方より寄せ来る敵を、今やをそしと待ち給ふ。」

三 段

去る程に、薩摩方は思ひくりに陣所を構へ、龍造寺山城守隆信方へ使者を立て、案内乞ふて内に入り、「此由斯くと告げければ、薩摩軍衆が寄せて有るならば、大軍を催し、唯安々と打亡さんと。早六國に觸れければ、我もくもと進む士、先一番に隈部左馬之助、鍋島丹州、添鳥右衛門、田尻某、寺山陸奥守、野口能登守、圓城寺美濃守、成松遠江守、一族には小川武藏守、小宮源左衛門、後藤家持、龍造寺家種、此の人々を初めとして、都合其勢六萬七千余騎は、時刻を移さず寄せて来る、龍造寺山城守隆信を大將として、九十三本の旗を靡かせ、島原にこそ渡さるゝ、頓て肥前軍衆は、薩摩方を一目見て、皆は中々此度の合戦は、案にも違はぬ小勢かな、いざ高珠子には有らぬ共、手の内に

揉まんとて勢ひ荒鷹の小鳥をねらふて勇むが如くなり、薩摩に給て島津中務殿之れを御覽なされ、いかに旁々あれを見よ、此度の合戦物に譬へ見れば、籠の内の鳥、網代に籠る魚とかや、前には大敷後は大海、左右は巖石に圍まれて、洩れて行く様は更になし、去れど又中務殿は、智慧第一の名將なれば、二心つかはん其爲めに、三百余艘の兵船は、皆島原の高濱に引上げ、悉く焼き捨る、頓て陣屋くりに觸れを廻し、此度の合戦、薩摩に二度歸るとは思ふなよ、皆島原の土と成るを定め、向ふ先は面も振らず、切て通れと諸軍勢に下知をなし、明くれば水無月十八日と申す、まだ東雲計りに、肥前方惣陣一度に、聞の聲をどつと揚げ、野口の陣に押寄する、先手の大將、隈部左馬之助、親興と名乗り、二千余騎にて大手の方に押寄する、薩摩方先手の大將、稻留左京、猿渡肥前守は千余騎を以て、肥前方大勢の中に、募地に切て入り、

追つ追はれつ請けつ流しつ三度の太刀打四度の追込五度の戦ひ六度の合戦七八度目には鎧を削り鎧を削り切羽の金も未塵になれと世にも烈しく爰を先途と戦ひしが隈部左馬之助を初め向ふ敵一千余騎は打取つたり去れと又稻留左京猿渡右京其外三百余騎はつまりつまりに討死す未だ惜しかる稻留は二十六猿渡三十一と聞えける爰に河田駿河守は兼て聞へし兵道者なれば清水谷に下り夜の間七度の水をかゝり天に向て秘法を行へ給へば源氏の氏神正八幡諏訪稻荷祇園春日の五社の神より此度の合戦は肥前は亡び薩摩は勝軍に疑ひなしと御記宣ありければ中務殿此の由聞し召れ斜に悦び最早此由陣屋くゝに觸させ給へば之を勢に島津主右衛門輝久は一千余騎を引て野首の陣より一つ目を相圖として切て出づれば肥前方小川武藏守の大勢にあろし合せ爰を先途と戦

ひしが向ふ敵一千余騎は打取り陣所さして引て行く其の勢に加治木彈正は三千余騎にて大手の口より切て出れば肥前方寺山陸奥守か勢にあろし合せ大勢の中に割て入り群る敵を弓手妻手に打捨て當るを幸ひ其處引くなと云ふ儘に此を先度と戦ひ給へば又も向ふ敵二千五百余騎に打取り陣屋を指して引退く爰に又平田和州村田狩野介二千五百余騎引て島原口より討て出で肥前方繩口の大勢にあろし合せ面も振らず火花を散して戦ひしが又も向ふ敵一千余騎は討取陣屋指して急ぎ行是は扱置き爰に又島津中務殿は軍は今が時分と心得て嫡子又七殿を御側に召れいかに又七唐土の虎は一日に千里を馳せて駆け戻り一身を捨て、毛を惜む夫れ日本の武士は幼き時より武藝を盡し名を未代に残し置く人は一代名は未代と申す必ず跡に残りて未練致すな名字の耻辱家の耻と

云ふより早く、東の方山の手口に馳せ廻り、肥前方大勢の中に横合より打て掛り、頓て大音揚げて、いかに旁々某を如何なるものと思ふらん、薩摩に於て島津中務とは某也、手並の程を手本にせよと言ふより早く、二尺八寸の大太刀を抜き持ちて、大勢の中へ割て入り、真向立割、車切當るを幸ひ、其所を打なと言儘に、追ひつ捲くりつ受つ流つ、西より東、蜘蛛手搔手、十文字も向ふ敵三千五百余騎は、打取て陣所をさして引き退き、是は扱置き爰に又、川上左京久堅は、軍は今が華と心得て、我手三百余騎を取構へ、桑原の陣に控へけるが、竊に寺山が死したる旗を奪ひ取り、肥前軍衆に様を替へ、敵陣の中をあなた此方と廻られ給ふが、鍋島に行き逢ひ、いかに鍋島殿某は士の未練ながら、只今中務殿の横入に目かくれて、我君隆信公の御旗本を

確と忘れ候ひしが、教へ給へと涙と共に申しければ、鍋島の運や盡きけん、太荒敵を味方の勢と心得て、我君隆信公は彼方に見えし小松原を北に廻り、本丸の陣へ三十六騎を御側に召れ、床机に腰を掛け、母衣掛武者におはします、急き参れよと教へける、左京斜に喜び、鍋島が敵の通り本丸か陣にせめ登り、もふは手の内と心得て、其日の装束を改め、いかに申さぬ隆信殿某をいかなるものと思ふらん、薩摩に於て島津義久の郎等、川上左京久堅とは某なり、此度赤星が兄弟の子供の仇、川上恨の太刀を請て見給へと、大音揚て申しける、隆信殿は大に驚き、扱ては中々川上は、薩摩に於て家ある武士か、又は家なき武士ならば、日下に廻れと有ければ、川上からくと打笑ひ、皆は中々思ひもよらぬ仰かな、士が士を打に、日下日表の差別なしと言儘に、三尺八寸の大太刀を援持て、隆信の弓手の袈裟打、水もたまらず

打○落○す○御○側○の○士○三○十○六○騎○は○此○由○見○る○よ○り○主○を○討○せ○て○叶○ふ○ま○じ○と○切○て○掛○
れ○ば○川○上○殿○は○陸○信○を○討○た○る○勢○ひ○に○世○に○も○烈○し○く○爰○を○先○途○と○戦○へ○ば○痛○は○
し○や○三○十○六○騎○も○一○ツ○枕○に○只○や○み○く○と○討○伏○る○隆○信○の○年○を○申○せ○ば○五○十○一○
頓○て○隆○信○の○首○を○太○刀○の○先○き○に○貫○き○て○小○松○原○の○本○陣○を○心○静○か○に○引○て○行○く○
頓○て○小○松○原○に○も○成○ぬ○れ○ば○鍋○島○丹○州○添○島○右○衛○門○彼○二○大○將○の○者○共○此○由○を○一○
目○見○る○よ○り○借○は○中○々○あ○れ○を○見○よ○薩○摩○軍○衆○が○何○時○の○間○に○奥○の○陣○に○も○れ○た○
か○な○主○は○討○る○手○勢○は○持○た○ず○我○が○君○の○敵○何○國○迄○も○落○ち○行○ぞ○逃○が○す○ま○じ○
と○言○ふ○よ○り○早○く○切○て○掛○れ○ば○川○上○殿○心○得○た○り○と○言○儘○に○向○ひ○た○る○先○は○只○一○
筋○に○切○て○通○れ○と○士○卒○に○下○知○を○な○し○寄○せ○來○る○敵○は○群○つ○て○追○ひ○つ○ま○く○り○つ○
受○げ○つ○流○し○つ○爰○を○先○途○と○戦○へ○ば○向○ふ○敵○數○多○打○取○り○仕○す○ま○し○た○り○と○味○方○
の○陣○に○引○て○行○く○頓○て○隆○信○の○印○を○實○驗○に○備○へ○け○れ○ば○中○務○殿○心○得○た○り○と○小

高き所に馳せ上り、大音揚て、肥前の大將龍造寺山城守隆信を、川上左京久
堅が打取りたりと呼ばりて、勝鬨を三度どうと揚げ給へば、薩摩軍衆は之
れを襲ひ、三ヶ國の勢は一手に成りて、肥前方落行勢に掛合せ、弓鐵砲を放
ち、掛呼き叫んで戦ひければ、痛しや肥前軍衆は、秋の田の水にあらねども
つまりく切て落さるゝものは數知れず、斯る所に島津又七殿は、鍋島
が落行所を目に掛け、駒を早めて、いかに申さん鍋島殿、何國迄落ち給ふぞ、
斯く申す某は薩摩に於て、島津家久が嫡子、島津又七とは某也、今年歳は十
三歳、軍は今日が初めなり、此度の合戦に討死す者也、我を打取て高名せよ
と、大音揚げて呼ひければ、鍋島も落ち行く駒の手綱を引返し、大將は打れ
手勢はなく、何の力ありて軍致さんと、馬より飛び下り、甲を抜て降参する
こそ哀れなり、又七殿思召す様、隆参したる士を見て捨てはいかゝせんと、

いかに申さん鍋島殿、島津が家を如何なる者とや思ふらん、悉くも清和天皇の御末なれば、島津殿に二度弓を引くこと無用なり、此度の合戦は赤星が敵軍の事なれば、國取る迄は及ぶまじ、肥前の國は御邊に預け置くとぞ仰せける、鍋島は大に喜び三度禮して御前を下り、肥前をさして急かるゝ、其の後中務殿は、打死有る首^{くび}を賦されける、肥前方には、龍造寺山城守隆信を初めとし、士大將百三十五人、其外總勢一万千七百余騎とぞ聞えける、薩摩方には、稻留猿渡を初めとし、上下共に八百余人、扱ても打死せし隆信の首を實驗に備へければ、頓て隆信の印を太刀の先に貫き、小高き所に差上げて、島津屋形を軍神摩利支尊天と伏し拜み、賊に島津方は今生忘れ難しと悦び給ふこと限りなし、爰に又八代御前は、此印を見れば、兄弟の子供のことがいや追るとて、烏丸にて蹴上げ蹴下し、七度が間氣色をなして、八

度目に納め置川上殿は、此由見るより、大に腹を立て、士が太刀の先にて取りたる印を、女の手足に掛けては如何せんと有ければ、又七殿進み出て申されけるは、いかに申さん川上殿、古より女章と言傳への有るが誠也との給ひて、様々川上殿の心を取り直し給ひけん、其年の年號申せば、天正十二年甲申、頃は三月十四日也、其の日の支干は辛の卯、源氏の氏神正八幡の御縁日、世の中は何と聞ても唱へても、浮は世の中つらきは隆信、さをひは薩摩方、物の哀れを留めしは、赤星が兄弟の子供にて、諸事の哀れを留めけり、

○小敦盛

初 段

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理り

をあらはす、驕れるものは久しからず、「貴き人も遂には亡ぶる習ひあり、されば此度源氏平家の戦に平家方一族母衣大將の其中に物の哀れを止めしは無官の太夫敦盛にて諸事の哀れを留めたり敦盛其日の扮装にはいつに勝れて華やかに先づ肌よりは梅の匂ひの肌寄に唐紅を召されたり、練絹に色々の糸を以て秋の野の草盡しを縫ひたる垂直に弓手の手づかひ、両面の臙當、萌黄、緞しの鎧着て、鍬形打ちたる兜の緒をしめ、鎌倉作りの大刀を佩かせ、二十四さしたる染羽の矢を負ひ、塗籠藤の弓を持ち、連錢葦毛なる駒に、梨地の時繪したる白覆輪の鞍をおかせ、御身輕げに召されしは、さも勇しくぞ見えにける、御一門主従の御供を召され、濱に下らせ給ひしが、御運の末の悲しさは、御父經盛卿より譲り給ひし、さえたといへる漢竹の、やうちやうを内裏に忘れたまひしが、若君様の悲しさは、捨て、御出

あるならば斯程の事はあるまじきに、彼の笛を忘れ置くこと、敦盛が末代までの恥辱と思し召し、取りに歸らせ給ひしが、箇様く、に時刻をうつす其間に、御一門の御座船も、遙かの沖に押し出す、傷はしや敦盛もせん方なく、鹽屋の方を心がけ、駒にまかせて落ちさせ給ふ、心の内こそ哀れなれ、こればさて置き、こゝに、又、武藏國の住人熊谷次郎直實は、今度一の谷の先陣を承れど、いまださままでの功名もなきに故に、天晴勇士の通れやな、よき大將もあらば引組みて、功名せばやと思ふ折節、敦盛を目にかけて、駒引きよせ打乘て、濱邊をさして、いそがる、直實やがて大音揚げて、それに落ちさせ給ふ、平家方にもよき大將と見奉る、かく申す、某は武藏の國の住人篠原の旗頭熊谷次郎直實とて、源氏方にも隠れなき敵に候、正しく敵に後を見せ給ふよな、引返し、御勝負候へ見まらせんと、扇を揚げて招かる、い

たはしや敦盛熊谷とは聞きながら、落つる味方の兵船を心懸け、更に耳にも聞き入れず、磯邊の方を心懸け、駒を早めて急かるゝ去る程に敦盛は遙の沖を御覽するに、御座船間近く寄せければ斜ならず悦び、膝より日の丸の扇をあけて沖なる船を招かせ給へば、船中の人々、其中に門脇殿御覽じに、伊賀の平内左衛門元國を召され、如何に元國あれを見よ、母衣かけ武者の船を招くは、左馬頭行盛か又は無官の大夫敦盛か、いづれも見よと御説あり、悪七兵衛承はり、某見定め申さんと、白柄の長刀もつとり杖につき、船舷につと立ち上り、甲を傾け磯邊の方をつくゝと打守り、嗚呼傷しの御事や、何とて御座船に召し後れさせ給ふやな、參議經盛卿の御子息無官大夫敦盛卿にて渡らせ給ふ、御馬の毛色、鎧の袖印に至る迄違ふところはましまさず、嗚呼傷はしやと申しあぐれば、門脇殿聞し召され、さて敦盛なれば

ば此船を早磯邊に寄せよとの御説なり、水主揖取り畏まり、俄かに楳揖をとりなほし、船を磯邊によせんとすれど、此中より吹き續きたる北風のはげしさに、名殘の浪の今日もたち、風は競ひて浪は小車の如くなり、白浪世界をあばき、眞砂も天に揚げれば、さながら雪の山の如くなり、小船ならば自ら右手左手に押廻さるゝものなるに、殊にすぐれし大船に、しかも大勢は召されたり、船は次第くゝにいづれとも、荒まく浪にせかれつゝ、磯邊によすべき様は更になし、敦盛は此有様を見て、モハヤ叶ふまじと思し召し、駒の手綱をかいくりて、海中にさつとかけ入り、浮きつ沈みつ一丁斗り出てたりしが、駒逸物と申せども逆まく浪にせかれつゝ、泳ぎかねてを見へにける、熊谷此由見るよりも、大音あげて呼ばる様、いかに平家の大将御坐船は遙かに程をへだてたりしかも、波風はげしきによもや叶はせ給ふ

まじ引返し御勝負候へもしも返し給はぬものならば某が長指を射て参らせんと弓と矢と打番ひそゝろに引てかゝりける敦盛駒をとめこゝを逃んとせしにかく運の極まる上はもしも熊谷が鏑矢に射止められなば平家末代迄での恥辱と思召れいさこゝにて勝負を決せんと合圖をなして駒の手綱をひきかへし海中よりさつと駈上り染羽の矢を打番ひかくと詠じ給ひける、

梓弓矢をさしわけて引くときは返す心を知るかそも君、

と遊ばし給へば熊谷も心ある弓取なればハット思ひ駒のあぶみを蹴張りて取敢ず、

いたつきのはや外れんと思ひしに矢と云ふ聲に立そとゝまる、と返歌をなして心静にまちにけり、

二 段

さる程に敦盛やがて打物の鞘をはづし「熊谷に打てかゝる」直實しつかと受けとめ追ひつ追はれつ受けつ流しつ火花を散らして二駒並び面も振らず切り結ぶ未だ勝負も見えざるに敦盛いざ組まんと打物かしてへ投げ捨て快よく近寄る直實共に打物かつばと投げ捨て快く駈けよりてむづと組み互にかはす聲のうち一度にあぶみて踏みはづし兩馬が間に喰と落ち上を下へと返しける痛はしや敦盛も心は猛く勇めども剛氣の熊谷物の數とも思はねば敦盛を心よく取て押へ首をかゝむとし給へど餘り手弱く思ひさしうつむきて御相恰を見奉るに薄化粧にかね黒の有様は殿上人の人の頃十四五計りと打見へて容顔殊に麗しく熊谷餘りの痛

はしさに、少しうちくつろげ参らせ、扱ては平家方にては如何なる御公達にて渡らせ給ふやな、御名字を名乗らせ給へと有りければ、敦盛は熊谷に組み敷かれながら、世にも苦しき息をつき、扱ては中々熊谷は文武二道の勇士と聞きつるに、何とて合戦に法なき事を宣ふやな、我は天下の朝臣として、雲閣の坐敷に連り、詩歌管絃の道には長じたりし身なれども、此三年が間、一門の運の盡きいと、あこがれ出しより、武士の勇める法を、あらく承るに、夫れ武士の名を名乗ると云ふは、互の陣に群りて、やなぐひまびらを腰につけ、互に打物抜き持て、我は何國の何某と名乗りてこそ勝負は致すなれ、我は又敵に押へられ、下より名乗ると云ふは、今こそ初めて承る、直實聞て仰せは、さなれど、名字をあらはし、首を取り、此直實が譽を顯はさん爲めと云へば、敦盛仰に夫は隠れもあるまじ、たゞ某が首を取り、そなたの

主の義經に見せ玉へ、若しも知らずば蒲の冠者に見せ給へ、蒲の冠者も知らずんば、今度平家方生捕の者多くあるべし、彼の者共に尋ねて、誰が首とも分らずば、其時こそ名もなき首ぞと思ひ、只叢に捨て置き給へ、さのみに物を尋ねるやな、早首取れや熊谷とありければ、直實承り、さては武士の勇める法を委しく知ろし召されしよな、世に物憂き物は我等にて候、君の仰に随ひ御首とらんとすれば、親と合戦子と争ひ、花の下なる半日の影、風の前なる一夜の燈、清風朗月、飛花落葉の如し、此度の合戦に熊谷が参り合ふこと、前世の宿縁と思し召し、御名を名乗らせ給へ、只奉公の其中に後世を吊ひ申すべし、敦盛は名はいつまでも合案るまじとは思へども、後世を吊ひくれうとのうれしさに、我を誰とか思ふらん、参議經盛の末子、無官は假名にて、太夫敦盛とは某にて、今年十六歳、戦は今日が初めなり、はや首取れ

や熊谷と宣へば、直實涙を流し、扱ては經盛卿の御子息、無官の方にて涉らせ給ふやな、今年御年十六歳、某が一子小次郎も、十六歳、扱ては御同年にてましますや、小次郎直家も、今度一の谷の戦ひに、魁いたし、弓手の腕に矢を射られ、某へ向て、此矢抜て玉はれと申せしに、敵と味方の其中で、余り心弱くと思ひ、はつたと打白睨み、いかに直家、其手が深手なれば、駒より飛び下りて自害せよ、もしも薄手なれば、敵と引組んで討死いたせ、篠黨の名を汚すなど、じつと白眼みしが、其時某が方を一目見て、敵の陣所へ駆け入りし後姿を見た計り、小次郎直家は、東夷の色黒し、今二目とは見ざりけり、此直實がつれなき命を長へ、武藏に歸り、直家が討れたりと言はば、誠に母が歎くべし、況んや經盛卿の御子息、今日華に染めたる若君を、磯邊に一人御残し、無や歎かせ給ふべし、此君一人討ち奉り、直家が恩賞に預かればとて、千

歳の壽き、萬年の齡を保つべき、末代迄ての物語に助けばやと思ひ、如何に若君、平家方へ御歸りの後は、武藏の國の熊谷と、引組んで候ひしが、我が子の小次郎に思ひ返し、助け參らせ候と、御父經盛卿に、能く御物語り候へと云ふより早く引き立て、鎧につきたる塵打ち拂ひ、馬に御乗せ奉り直實共に馬に打乗り、互に暇乞して四五町許りは見送りしが、後の山に響く鬨の聲、誰ならんと見返れば、弓手の方には森田、平山扣へたり、妻手の方には虎江殿、續て佐々木、四つの目の紋の旗を押立て、上の山には御大將、九郎判官源義經、白旗を靡かせ給ひ、御膝元には、武藏坊辨慶、相摸、龜井、片岡、伊勢、駿河、源氏の一族聲々に、武藏國の熊谷は敵と引組んで候ひしが、既に組み敷きながら、助くるは、必定逆心と覺えたり、二心ならば、熊谷を先づ討取れと聲掛けられて、今は直實も詮方なく、又扇を上て、招き寄せ、あれ御覽候へ、

如何にもして助け申し度は候へ共味方の軍勢雲霞の如く満ちたり、
 よもや逃れさせ給ふまじ哀れ願はくば直實が手に掛け奉り後の世の御
 供養をなさむと有りければ敦盛涙を流し爰を逃行く先にて下郎の者の
 手にかゝり面を晒さんも無念なり斯かる義理ある熊谷の手に討たるゝ
 ものならば恨むる處更になし早首取れや熊谷と西に向ひ覺悟極めてお
 はしける鬼を欺く熊谷もいつくに太刀を立つべきとも思えず只途方に
 暮れてぞ居たりける櫓番所の前なれば直實是非に及ばず水もたまらず
 敦盛の首を打落すさしも剛なる直實も暫しが程は心も亂れ氣も消えて
 死骸に暫し取付て濱に伏してそ泣き叫ぶ弓矢取る身の哀れにや今は直
 實もやうく心を取り直し御死骸を引立て見るに鎧の弓合せの弓手の
 脇には巻物一卷さゝれたり妻手の脇には漢竹のようちやうをさゝれた

り御死骸を葬り奉り御首巻物漢竹を取持て駒引寄せ打乗て大音あげて
 呼ばゝるゝ平家方の一族母衣大將無官の太夫敦盛を武藏の國の住人篠
 黨の旗頭熊谷次郎直實討ち取りたりと凱歌を吟とあげ陣所をさして行
 くやがて大將敦盛の首を實檢の後熊谷に給はる直實給はる首をおし戴
 き最早是迄てなりと思ひ切りて弓の絃ぶつと切り放ち太刀は固より弓
 と矢を投げ捨てもとどりをたちきつて武士を捨て鎧の袖を墨に染め其
 名も蓮生法師と様をかへ新黒谷に引籠り三歳が程は法華經百萬遍を唱
 へ敦盛の追善を營みける是も敦盛御最後の一念の言葉をかはし又熊谷
 が武士の情ある故何と聞いても連ねとも憂は世の中義理は熊谷物の哀
 れを止めしは無官の太夫敦盛に蓮生法師の後の歎きにて諸事の哀れを
 止めたり、』

○栗津の露

初 段

名將の下に弱卒なし、信なるかな此言や、木曾左馬頭義仲は平家の軍を引
き落し、頓て都に入替り、勢旭の昇る如くよろづ我儘に働けば、相従ふ者等
京中諸所に打散りて、金銀財寶を奪ひとる、そのみならず恐多くも、法皇
を五條の御所に押込め、参らせ、四十九人の官職を奪ひ、百官有司の進退も、
おのがまに、行ひつゝ、亂暴大方ならぬよし、追々鎌倉にぞ聞へける。比
は元暦元年正月十三日、右兵衛佐頼朝は、木曾が狼籍しつめんと、舍弟蒲冠
者範頼を大手の大將、九郎義經を搦手の大將として、鎌倉を出發せしめら
る。範頼に隨ふ輩は、武田太郎信義、加々美遠光、一條次郎、板垣三郎、小笠原次

郎を初めとして、千葉常胤、和田義盛、稻毛、榛谷金子、猪俣、芦名高山等、都合其
勢三万五千余騎、義經に隨ふ人々は、安田遠江守義定、大内太郎維義、田代冠
者信綱、畠山次郎、土肥次郎、其外佐々木兄弟、梶原親子、熊谷、平山、佐藤、伊勢、武
藏坊辨慶等、都合其勢二万五千余騎、尾張の熱田に勢揃して、宇治と瀬多へ
ぞ向ひける。爰に佐々木四郎高綱は、物勢出發の日に、後れ、鎌倉殿へ參上し、
御暇申して罷り立つ。頼朝、佐々木を呼び返して云はる、様、今度木曾追討
の軍には、定めて宇治勢多の橋を引くべきなり、其方近江生立の事にして
あれば、川の案内知りつらん、宇治川の先陣仕り候へとて、生月と云ふ名馬
をぞ賜ひける。高綱畏りて頂戴し、かゝる御惠にあひ奉る事生涯の面目此
の上なし、今度の軍、佐々木討死と聞し召され候は、川の先陣人の先陣人
に越さると思し召されよとて、其まゝ御前を立てけり、爰に又梶原源太景

季は、今度拜領申したる、摺墨と云ふ逸物を、黒装束に仕たてさせ、舍人八人に牽せつゝ、駿河なる浮島が原にぞ着きにける。此所にて小高き所に打上り、しばし控て人々の牽かせし馬を見てあるに、蒲殿の月の輪、九郎殿の青海波、和田義盛の白波、さてはまた、畠山の秩父鹿毛等を初めとし、大名小名思ひくゝの鞍置きて幾千万と數知らず、かゝる中にも景季がするすみほどの駿馬は更になかりけり。景季あまりのうれしさに、金子十郎を打ち招き、頻に誇りてある所、佐々木が池月ひき來る、渺茫たる春の野の、草も萌なん比なれば、生月勇みにいさみ立ち、鞍もとぶほど躍りつゝ、二たび三たび嘶ける。聲はさながら鐘を撞くが如くにて、二里の路を隔せたる田子の浦までひゞきたり、畠山重忠いひけるは、今の嘶きは生月が聲也、半澤六郎聞き咎め、かばかり多き勢の中、いかて生月に限るべき、生月は蒲殿梶原殿御所

望あるにも免されざりしを、誰人にか賜ひ候はん、重忠重ねて云ひけるは、よもきゝはたがへじ、一定生月が聲なりといふ間程なく生月を、舍人六人にて牽き來る、梶原景季之を見て、郎等を以て尋ぬるに、佐々木殿の馬に候ふと舍人は答へて打過る、源太不審晴れやらす、三郎殿に候か四郎殿に候かと、再び尋ね問はするに、四郎殿とぞ答へける、源太之れを聞くや否や、口惜しさやる方なし、再三所望申しても御免なかりし生月を、高綱にたまふ意恨さよ、大將たる其人の、大事を前に置きながら、偏頗せらる事やある、是程の御氣色にてあらんには、千世さかゆべき世の中ならず、思へば、電光朝露の如し、終に死なんは同じこと、日頃佐々木に宿意なけれど、時に取りての敵なり、さし違へ死すべしと思ひ詰め、今や今やと相待ちける、かくとも知らぬ、高綱は、手の郎等十七騎相從へて出來り、源太やがて言をかけ、いか

に佐々木殿生月は下し賜ひて候にやと問ひかくる高綱拜領申せりと實を以て言ならば刺違へんは必定なりすかして見んと思ひつゝ莞再と笑ひて申しけるは此間久しく見參せず仰の如く生月を牽て候こと不審に思召されん承れば蒲殿も貴殿も御所望ありしに下されずときいつれば高綱如きが乞ひたり共逆も許されはなき事と思ひ御厩の小平治を相かたらひて盗み出して候也今にも鎌倉より御勘氣の御使や來るとひたすらに胸を冷す所也とさあらぬ體にぞ答へける景季案に相違してげにもたやすく盗み出し給へるものかな其義ならば某も盗むべかりしものとて打笑ひつゝ諸共に馬をならべて打にけり』

二段

さる程に義經の二万五千餘騎川端に臨みて見渡せば敵は川岸に播楯かいて矢尻を揃へて待かけたり川の中には亂杭逆茂木隙なく打て大綱小綱を流しかけ時しも雪消の頃なれば水深くして流れ早くいづこを渡らん様もなし本陣評議の最中に畠山次郎重忠進み出て某瀬踏して御目にかけんとして手勢引き具し五百餘騎馬の鼻を双ぶる所平山季重佐々木太郎澁谷重佐熊谷親子宇治の橋桁打渡り早戦を初めたり是に引違へて佐々木四郎高綱梶原源太景季は平等院の小島が崎へ打向ひ馬を飛ばして打て出づ梶原其日の装束には木蘭地の直垂に黒皮威の鎧着て三枚甲の緒をしめ重藤の弓を持ち小中黒の矢負ひ塗鍔の太刀佩いて鎌倉殿より賜はりたる摺墨の名馬に黒塗の鞍置てぞ乗りたりける高綱が装束は襦の直垂に小櫻を黄に返したる鎧に鉞形打ちたる甲の緒をしめ笛藤の弓

の真中取り、廿四指したる石打の征矢頭高に負ひ、いかもの作りの太刀帯
びて、是も鎌倉殿より賜はりたる生月と云ふ名馬に黄覆輪の鞍置て乗り
たりける、景季は三十三、高綱二十五歳にて我後れじと馳せ向ふ、勢龍虎に
異ならず、源太一段ばかり向なるを、佐々木後より詞をかけ、いかに梶原殿、
此川は五畿内一の大川なり、御馬の腹帯の延びて見ゆるぞやと呼ばはれ
ば、源太さてはと思ひて、手綱を控へ弓弦を口にくはへて立上り、腹帯を解
きて、引締くしめ直す、其隙に高綱駈抜けて、川へ颯と打入りたり、源太たば
かられぬと安からず思ひ、續いて打入りたり、いかに佐々木殿、高名せんと
て不覺なし給ひぞ、水の底には大綱を張たり、心得給へとよばれば、佐々
木もさもあらんと思ひ、太刀引抜きて馬の足にかけ、大綱小綱三筋ばかり
も切りて流す、宇治川流れ早しと雖も、名馬に乗りたることなれば、眞一文

字に打渡り、向ひの岸に打上り、鎧踏み張り弓杖つきて、佐々木四郎高綱、宇
治川の先陣と大音あげて名乗りしは、天晴勇者と見えたりけり、源太が乗
りたる摺墨は水にせかれて流れ渡りになりければ、遙かの下に打上りぬ、
佐々木はやがて使をばせ先陣の様鎌倉へ注進す、梶原も先陣とぞ注進し
ける、鎌倉殿使に對し、佐々木梶原生てありやと問はせ給へば、何れも生て
罷在とぞ答へける、其後の注進に、佐々木先陣とぞ記されける、武士の八十
氏河のいちはやき、手並の程こそ見えにけれ」

三 段

あはれむべし、旭將軍とさへよばはれたる、木曾佐馬頭義仲が軍勢は頼み
切たる切所の河、難なく敵に涉られて、二萬五千余騎いづこを防がん様も

なく、心ならずも押立られ、木幡の邊まで引き退き、大將根井大矢行親も、矢種は残す射盡して必死となりて戦ひしが、逆も爲術なきまゝに都をさして落ち行けば、義經押鼓を打せ、潮の湧くが如く、次第を亂さず、木幡山深草過ぎて早既に都の中へ亂れ入る、かるゝ所に木曾佐馬頭義仲は赤地の錦の直垂に、紅の衣を襲ね、紫系威の鎧着て、石打の征矢を負ひ、百騎ばかりを前後に備へて五條を東、六條河原に打て出れば、根井楯が率ゐたる二百余騎に行會ひたり、主従三百余騎轡を駢べて見渡せば、七條八條の河原より法性寺柳原東山まで押廻はし、白旗一面にたなびきて、此方に向て進み來る、義仲馬の頭を立て直し、眞一文字に駢り入りて、畠山が陣を初めとし、梶原澁谷其外の敵の備を打敗り、尙も進みて、義經の一萬余騎の本陣に、面も振らず駢入りて、火花を散して戦ひたり、敵は目に余る大軍なり、味方は次

第に勞れはて、繼に十三騎に討成され、四天王と聞えたる、根井も楯も打死す、義仲も左右の眉の上鉢付の板に二筋の矢を射付けられ、河原を上りて下揚げて追ひ來る敵を打靡け、遮る備を切破り、四の宮河原神無の社關の明神打過ぎて、大津の在家を行く程に、僅か七騎になり、にけり、爰に今井四郎が向ひたる、勢多の備も破られて、敵の大勢四方より雲霞の如く攻め來れば、或は討れ、或は落失せ、皆散々に成果て、兼平今はせん方なく、粟津の松原まで唯一騎、馬を早めて馳せ來り、義仲にこそ行逢ひける、義仲悦び兼平が手を取りて申さるゝは、都にて如何にもなるべかりしをこそ、さて來つる甲斐ありて逢見ることの嬉しさよ、さらば兵を集めよとて、兼平が旗押立て、暫時控て待つ程に、此所彼所より集りて、五百余騎にぞなりにける、義仲喜び魚鱗に備へ、千葉親子、河越金子、猪俣其外甲斐源氏、武田、加賀美、一條

等近く備へに駈向ひ、命を限に戦ひしが、遂に又六騎に打なされ、今はかうとぞ見えたりける。こゝに、義仲の妾、巴女と云ふは、樋口今井が妹にて、年は今年廿五、色白く髪長く、眉目形美麗にして、力量殊に勝れ度々の軍に大將として、一度も不覺の名を取らず、僅六騎になるまでも、尙義仲の側にあり、義仲巴女に向ひ運命既に極りぬ、快く討死せん、嚮きにも義仲云ひし如く、最後に女を連れたりと、人の云はんも恥しく、其上故郷へ誰ありて、此人々討死の様を語らんや、敵も人しげく見ゆるぞや、早立去れと云はるれば、兼平も亦詞を添へ、様々さとし勸めけり、巴女泪をはらくと流し、誠に木曾を出てしより、一日片時も離れ參らせず、冥土までも御供と思ひしものを、是非もなし、女と生れし身の因果、さらば御暇申さんと、名残はしてしなけれ共、互に目と目を見合せて、泪にむせびて立別れ、志賀辛崎に差懸り、弓切

折て杖につき、信濃をさして落ちて行く、心の中こそ不便なれ、兎角する間、に敵の兵者又四方より寄せくるを、西に當り東に馳せ、是を限りと戦ひしが、は皆悉く討死し、義仲兼平主従僅か二人となりぬ、義仲兼平に云はるゝは、日頃何とも思はざりし薄金の鎧の重く覺ゆるなり、兼平申すらく何條さること候ふべき、御年爰に三十七、御身盛にあるものを、味方に勢なき故ならん、兼平一人を千騎万騎と思し召せ、終に死ぬべきもの故に、わるびれ給ふな向ひなる岡に見えたる一村の村の下にて御自害遊ばせ、其まで防矢仕り、頓て御供申すべし、義仲、又も言はるゝは、汝と一所に死なんと思ひ、都を落ちて來しぞかし、同じ枕に如何にもあらん、兼平また申すやう、君此所にて御自害あらば、我また討死せん、同じく御供とこそ申すべけれ、流石の征夷大將軍の雜兵原の手に懸り給はん事、未代迄の名折なり、疾々落給

へとすゝむれば、尤もなりと云ひつゝも、岡の松原こゝろざし、落ちて行か
 る、其隙に、今井は敵に相當り、死物狂にぞ戰ひける、義仲別れて唯一騎、頃
 は正月二十一日、入相近き程なれば、薄氷ははりたり、深田とも知らず、馬を
 ば乗入れたる、泥は深しあふれども、馬も疲れて働き得ず、さるにても兼平
 は、如何なりしと振返り、見らる所を敵の兵者、石田の次郎爲久が追ひ懸け
 來りて放つ矢に、内兜したゝかに射付けられ、痛手によはり、其儘に兜の眞
 甲馬の頭に押し當て、うづぶしけるを見るよりも、石田か郎黨落ち合ひ
 て、終に御首を打落す、あはれと云ふも愚なり、兼平此様見るよりも、今は誰
 が爲め軍せん、是れ見給へ日本一の剛者自害する様見覺へて、手本にせよ
 と云ふまゝに、太刀の切先口にくはへ、馬より眞逆さまに落ちたりしか、刺
 貫かれて死にたりけり、嗚呼昨日まで旭と呼ばれし、將軍も今日は粟津の

夕露と消えて跡なき有様は、楚王項羽、江にて亡びし様もかくやあらんと
 思ふもいとあはれなり、人生朝露の如しとは、かゝる事をやいふならん、

○形見の櫻

初 段

久方の雲井に高く照る月も、満つれば欠くる習あり、況してや人間の世の
 盛衰は、まのあたり「此理の例は爰にあらはるゝ、」されは伊集院源次郎直實
 は、島津の重臣として、庄内八万石を領し、榮耀驕侈に誇り、父幸侃か慾の余
 りにや、叛逆を企て、君の御手を穢させ給ふにより、忤忠實父の叛意を繼ぎ、
 頃は慶長四年潤三月、正旬庄内都の城に立籠る、山田安永、志和、地城、財部、高
 城、野々、三谷、梶山、勝山、山之口、梅北、恒吉まで、都合十二の砦を構へ、龍の雲を

起し虎の風を呼ぶ勢にして白石永仙を初めとして、邪答院左近、伊集院新右衛門尉、比志島式部少輔、倉野七兵衛、伊集院掃部助、猿渡肥前守、伊集院新部小輔、忠實、忠能が弟、伊集院小傳次等都合其勢二万餘騎、皆々に馳せ集り、籠城の用意をなして、島津屋形に弓を引くとの聞へあれば、公聞召され、以ての外に腹を立て、其儀ならば早く討手を差向け、源次郎か首を刎ね、實験に備へよとの御説なれば、先一番に島津中務小輔、忠國、同圖書頭、忠長、新納武藏守、忠元、樺山權左衛門、久高喜入、攝津守、忠正、伊勢兵部小輔、貞昌、比志島紀伊守、國貞、阿多長壽院、盛淳、山田昌巖、押川強兵衛、村尾源左衛門、笑清等を先として、物に馴れたる屈強の兵者共、馳せ集り、殘る所なく手配りし、軍旅の指揮をなし給ふ、爰に本郷作左衛門尉、三久は、北郷長千代、丸を引き立て、都合其勢十萬餘騎、兜の星を炎天に輝し、旗指物を風に翻し、同六月上旬吉

日を撰ばれ、君の御馬を出させ給ふ事さも勇ましくぞ見えにける、是は扱置き爰に又、平田三五郎宗次は、平田太郎左衛門、増宗の息男とかや、今年三五の秋の月雲間をいづる風情より、尙妖艶に麗しく容色無双の少年なりしが、吉田大藏清家と兄弟の契淺からず、共に故郷を出でしより、片時も側を立ち去らず、征鞍山路を分くる日も、同じく迷ふ馬蹄の塵、軍旅野外に屯せば、同じ襖の假枕共に眺むる夜半の月、いはんや合戦の場迄も、同じ道にと志す、去れば宗次其日の装束には、薄紅の直袴に卯の花威しの鎧着て、態と甲は召さざりしが、緑の黒髪振り分け、平安城長吉が打ちたる大身の鎗を携へ、今ぞ出陣になりぬれば、宗次は母の前に躊躇さ、今生の暇乞を述べければ、母上は唯涙に暮れて、暫し言葉もなかりける、嗚呼、親子の別れ程、何に譬へん方もなし、哀れ貴さも賤さも、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ

知られたりやがて宗次は馬に打乗り急ぎしに跡より母上呼び返し如何
 に宗次殿合戦に臨み未練なことはしたまふな屍は戦場に朽つるとも名
 は末代に残さるべしと聲も枯野のさりくす泣きわめきて申さるゝに
 宗次は何といらへもなく唯茫然として居たりしが振り分くる黒髪の鎧
 の袖にばらくと亂れかゝりし有様はさながら楊柳の雨に洗はれ春風
 に打靡く風情なりやがて宗次は清家に追ひ付き俱に打つれ急ぎしに爰
 は早や敷根の里に成りぬれば音に聞えし門倉薬師に參詣せんと駒より
 飛び下り恭しくも南無薬師尊と合掌し此辻堂に逍遙して一首の歌をぞ
 連れける

書きおくも形見となれや筆のあと

我はいつこの土となるらん

と矢立を出し清家宗次を抱き揚げて筆先き高き天井の板の表に記さる
 又は此度庄内一亂によりて清家宗次打つれ合戦に趣くと堂の柱に書
 き付けしは末迄も止りて見る人袖を絞りける共に踏み出す武者草鞋結
 び合せて行く先の譽は後に知られたり

二段

さる程に清家宗次打つれはるくと急ぎしに最早都の城にも成りぬれ
 ば柳河原の邊りにて春日主左衛門道春に行心逢ひしが「個は如何に清家
 宗次殿にてましますか」嗚呼羨しき有様かな御存知の通り某も内村半平
 と兄弟の契縁からず春は花秋は月見に詩歌を吟じ武士の勇める道を相
 勵み樂みけるに計らずも此度一亂到來し矢猛心の梓弓互に敵味方と引

き分れ、今は半平が身の上をいとし床しく思ひし故、志和地の城主、伊集院
 掃部助に認め、御内の内村半平と兄弟の契約致せしにより、一日の對面を
 免し給へば、生涯の本望なりと思ひの程を深く書き込めし、矢文を以て乞
 ひけるに、掃部助いと親しみの實情を感じ情ありて、此程柳河原に於て頼
 みある中の酒宴致せしに何語るべき暇もなく別れの盃さすが又いつか
 其日も暮ればどりあやにくも泣て別れの哀れなり、涙川其源を尋ねれば
 誰が誠より出てぬらんか歌は又古歌にも「逢ふ時は語り盡すと思へども
 わかれになれば残る言の葉、」自身の上に白雪の積る思ひは、此道春が胸の
 關、海士のたく火にあらねども、夜は焦れて螢火の燃へて飛立つ方もなし
 と、清家が鎧の袖を取りて道春がさめくと泣きければ、清家も共に哀れ
 を催し互に涙を流して此場を別れける、斯かる所に敵味方の鬨の聲、矢斗

びの音夥しく聞えければ、清家宗次諸共に馬に打乗り寄せくる敵に打ち
 向ふ、清家が乗りたる馬は逸物なれば、思はず宗次二町計り後れけるに、兎
 ある木影よりはやり男の若者五六人、宗次を見掛け、天晴類ひなき美少年
 かないて生捕りにして慰み物にせんと、大手を廣げて取てかゝる、宗次聞
 くよりも某を生捕り慰み者にせんとかや、汝等如きものに此宗次がをめ
 くくと捕らるゝものかほと、縁の黒髪逆に立ち向ふ敵を瞬く間に、二三人
 突き伏せ、車輪の如くにつき廻る、恰も鬼神を取りひしぐ勢なれば、今や敵
 兵叶ふまじとや思ひけむ、逸足出して逃げて行く、宗次之れを見るよりも
 最前の廣言にも似ぬ臆病至極の者共、返せ戻せと聲をかけ追ひ掛けられ
 ど、臆病神に誘はれ跡をも見ずして逃げて行く心の程こそ淺ましけれ、宗
 次は朱になりたる大身の鎗を流るゝ水に打注ぎ暫し息をぞつきにける、

爰に清家は、黒皮威の鎧着て、五枚甲の緒をしめ重、藤の弓の真中を握り、三十六指したる大中黒の征矢を負ひ、月毛の駒のいたく逞しきに乗りたるが、大勢の中に打籠められ斯くては叶ふまじと大音揚げて名乗るやう、爰に控へしは島津方に於て吉田大藏清家とて名を得たる強弓の精兵、矢次早の手利なり、かゝる矢先に敵は嫌ふまじとさし取り引詰め射る程に二十八騎は射て落す、今は已に矢種もつきぬれば持ちたる弓をからりと投げ捨て、群る敵に切り入る、元より丸目藏人惠頼が門人にて待捨流の達人なれば右往左往に切り廻り當るを幸ひ切り伏せ、薙ぎ伏せ、恰も虎の林に荒るゝに異ならず、今は敵兵もあぐみ果て手詰の勝負は無用なりと、鐵砲の者十四五挺を並べ懸けてぞ打ちにける、痛はしや清家が胸板を打貫かれ、哀れ鐵壁にあらざれば、終に財部の朝の露とぞ消えにける、今を盛り

二十八惜まぬものは無かりける、斯る所に清家が郎黨佐藤兵衛武任は主人の清家の死骸を肩にかけ、味方の陣に退きしに、宗次之を見て、扱ては清家殿最早討死召されつるやな、死なば一所と云ひかはせし合戦に、隙なくして後れしこそ、嗚呼無念なりと、其儘駒より飛下り、清家が死骸に抱き付き、打萎れたる卯の花の鎧の袖に亂れ髪世にある中の言ひがはし、桃李は物は言はねども、今は最後の色見えて、跡に残りし紅葉々の散るも惜しむぬ、大刀の鞘、是までなりと思ひ切り、武任さらばと云ひ捨て、駒引寄せ打乗りて、大音揚げて呼ばゝるゝ、某は島津方にて平田三五郎宗次なりと、大身の鎧を馬の平首に引きそばめ、手並の程を見せむとて、面も振らず敵陣の方に割て入る、當るを幸ひ、突き伏せ、薙ぎ伏せ、必死になりて戦ひけるに、向ふ敵をば數多討取り、今は既に我身も數ヶ所の疵を蒙りければ、哀れ三

五の秋の空替り行く世の習ひにて、義の爲めに骸を戦士に晒し、百年の命を縮め一陣の風に誘はれて、終に財部の草葉の露と消えにける、今を盛りの花衣、さて見る人々、鎧の袖をぞ濡しける、

三 段

爰に又新納武藏守忠元は、文武二道に達し、和歌の道にも長じたる身なりしが、今度の合戦にも『粉骨を盡し』八旬に垂として山田の城を攻め落し、比類なき働きありしも兼てより、我軍卒の武勇を賞表し、仁愛深く恩賞を與へ、懐け給ふにより、向ふ所敵なく、皆我手足を使ふ如くにして、假りにも敵に押付を見せたる例しなれば、近國他國に隠れなき武勇の程ぞ知られたり、之れは、扱置き、爰に又別けて哀れに聞えしは、富山次十郎とて、生年二

八許りと打見えて、容顔美麗の小年なりしが、花やかなる鎧を着て、一陣に進み出て、天晴れ勇しく見えたりしが、敵の放てる鐵砲に眞向を打貫かれ、終に財部の草葉の露と消えにける、之を聞くより忠元は、早くも尋ね問はれしに、蘭麝の匂消えやらず、蓬が本に打伏して玉の様なる額も、忽ち消えて雪霜の氷の肌と冷えわたる、姿となりてあぢきなや、朝在紅顔、誇青路夕化、白骨朽郊原、然らば詩の心にも同じ思の苦むしる、露をかたしく草枕、寝亂れ髪は打解けたる、姿と見えて秋の野の千草にすだく虫の音と、泣く泣く死體を埋めける、落つる涙をふしぬぐひ、一種の歌をつらね、追善に供へける、

『さのふまで誰が手枕に亂れけん蓬が本にかゝる黒髪』とつらね給ひて手向の水をそゝぎ、暫し回向をなしにける、されば形見の櫻誰が此所に植え

置きて、名も資部に勾ふらん、聞く人見る人涙は袖にあまりけるかゝる折しも所々の陣、山田安永志和地の城、合戦烈しく太刀打のしのぎを削る鏑音の轟く駒の足並も、揃ひ兼たる敵味方、命は塵芥よりも軽く義は金鐵より重くして、死骸の上を乗り越乗り越え、われ後れじと戦ひしは、何時果つべき軍とも見えざりける、又は白石永仙の姦計にち入り味方の兵も數多損じければ、同く六月上旬、森田に御陣を移させ給ひ、志和地の城を取り圍こみ、晝夜を分たず攻めければ、先づ一番に島津中務大輔家久、同圖書頭忠長、新納武藏守忠元、入來院重時、又は内府公の御加勢、透間なく、素より井樓を揚げれば、敵の城内眼下に見下し、敵地の案内能く知る故に、弓鐵砲の矢先を揃へ、ねらひつめて打つ程に、打たるものゝ數知れず、又兵糧の道を絶つに飢に及ぶもの數多あり、只やみくくと城を明渡し、落ち行くこそ

哀れなれ、内府公庄内合戦の注進を聞し召し、山口勘兵衛尙方、和久甚兵衛を差し下され、和睦降參致すべきとの命を負り、一命を助け置くべきとの御事なりしが、其頃忠實は、都の城を兎に角堅めけれど、邪は正に敵し難く、十二の砦の過半落城に及び、日本兵氣も衰へ、只術計に盡き果てし折節なれば、こは如何に、難有御説なりと、頓て君の御前に參り降參の趣、後悔の色を顯はし申上ぐれば、君聞し召され、汝が日頃の逆罪深しと云へど、内府公の命により、又當家の門葉、先祖の舊功棄て難く、殺人力活人劍の心を以て死罪を宥め、一万石の地行を賜り、元の如く臣下となし給へば、忠實は以ての外に難有御意を蒙り、頓て御前を下りける、其後忠實日州野尻の邊に狼狽し、やつれ果てたる有様なりしが、穆佐の士押川治右衛門、淵脇兵馬と打列れて野尻の原に雉子狩りに出でけるに、押川一つの雉子目掛けねらひ

つめて打程に、鳥は逃げ去り誤て忠實が眞甲を打通し、駒よりどつと落ちて死したりける。是も忠實が罪科、天道未だ許さざるにや、終りの果てこそ恐しけれ。又は白石永仙は、主人忠實に反逆を勧めし科により隅州しらの郡臨本に於て、獄門にかけられ、其巨賊残らず殺されける。去れば忠實は譜代恩願の重臣として、莫大の御高恩を蒙り御聲に迄もなりたりしが、如何なる天魔の魅入りぬらん、巧みの程ぞ知られたり、之れに依りて、薩隅日三州靜謐に泊る御代こそ目出度けれ。」

○響の駒

初段

常盤かきはのとしへに、八千代を懸て深緑吹くことがらしに、置く霜に、色

も變らぬ目出度さを、今日此頃は如何にして、緑の色は衰へつ、枯れもやせんと、思ひしは實に道理を、幾月日雨降ることのあらずして、耕す業は安からず、植にしもものは枯れ果て、日照り續きの悲しさは、飢て倒るゝを待つのみぞ、何れの里も雨乞を、尊き神に祈りける、御驗ありてか小夜ふけて、松の梢を誘ひ來る、嵐につれて驟雨、喜び祝ふ民草の、萌え出なんと驚ける、一日二日と過る間に、幾重と厚き叢雲は、うたてや憂ひのたねとなり、朝起き出ては空を見つ、又もや今日も降り續く、事よとつぶやき暮しけり、果せる哉國々の、小河の水はみなざりつ、大河となりて時の間に、堅き堤も破らるゝ、中にも時の將軍の牙城を建てし大江戸の、東境を横ぎれる、隅田の河原の、凄じさ、晝にさへ寫せぬ有様を、聞え上げけり將軍に、家光公は聞し召し、猶豫ならじと近臣を、打從へて御櫓に登りて遙か見渡せば、聞きしに勝る

有様ぞ、濁く水は分かねども、小家の流れ行くらし、扱ては多くの人々の、命の際の一大事、いざや自ら乗り出て、危き民を助けんと、其旨仰せ出さる、實に將軍の御成こそ、尊きととて常の日は、幾日前より道筋の警護にいとよいぞがはし、左あるを今日は輕々と、多くの衛士も從へず、俄に川原に出てましの程過ぎてより重臣も、從ふ如き次第なり、床几にかゝりて指揮したる、征夷將軍家光の、威望は特に尊くて、流れ來る女子供迄も、梓の弓と年老ひし、翁も多く助けられ、救はるゝ者數知れず、斯る烈しき時さへも、武勇にはやる武士の、道にかしこき將軍は、治に居て亂を忘るなど、聖の言の葉思し出て、黒味に濁りて恐ろしき、此水勢に駒をかり、渡せとこそは仰せられ、左右の臣を見返へらる、去れども君の仰をば、畏みまつりて、吾れ先に駒乗り入れて、功名のさきがけせんず者あらじ、皆々顔を見合せつ、早瀬

を○見○て○は○た○め○ら○ひ○つ○答○へ○ま○つ○れ○る○者○ぞ○な○き○將○軍○之○れ○を○見○そ○な○は○し○汝○等○如○何○に○余○が○命○を○背○き○て○渡○す○者○な○さ○か○昔○し○源○氏○の○士○に○譽○も○高○き○高○綱○や○景○季○ば○ら○は○宇○治○川○に○駒○を○競○ひ○て○敵○軍○を○破○り○し○た○め○し○あ○ら○ず○や○は○或○は○近○江○の○湖○を○乘○り○切○る○猛○者○も○あ○ら○ず○や○は○世○の○太○平○に○慣○れ○初○め○て○弓○絃○の○音○の○響○か○す○ば○太○刀○抜○く○術○も○お○の○づ○か○ら○忘○や○す○ら○ん○汝○等○の○か○よ○は○さ○き○心○は○武○士○の○數○に○は○入○ら○ぬ○者○ぞ○か○し○サ○ラ○バ○汝○等○戰○場○に○臨○み○し○時○は○如○何○な○ら○ん○矢○叫○の○聲○銃○の○音○聞○き○な○ば○如○何○に○汝○等○は○魂○消○る○ば○か○り○驚○か○ん○予○が○言○の○葉○を○守○ら○ざる○卑○怯○の○や○か○ら○か○い○ま○し○め○の○鑑○に○自○ら○乘○入○れ○て○世○の○太○平○に○な○れ○な○れ○し○侍○共○の○眠○を○ば○さ○ま○し○呉○れ○ん○と○の○た○ま○へ○り○傍○の○人○々○驚○き○て○コ○ハ○危○う○か○り○我○君○と○駒○の○手○綱○に○す○が○り○つゝ、諫○ひ○る○臣○も○あ○り○つ○れ○ど○さ○ら○ば○と○言○ひ○て○此○儘○に○思○ひ○止○る○君○な○ら○ず○放○せ○と○鞭○を○揚○げ○玉○ひ○終○に○は○諫○む○る○忠○臣○の○面○を

打てどいかに一度手綱を放ちなば君は逆巻く水底の藻屑と消へん
 目シヤ又神の御助あるとも尊き御身を傷はい如何なる事を生せん
 せと打てど放たじと手綱にすがるせときはに誰とは知らず水上より小
 黒き馬を乗入れて浪のまに漂ひつさしも烈しき水勢を美事に駒を
 あやなして覺悟極めし猛者ありき將軍馬上にみそなはし心の内にうな
 づきて駒乗り返し人々よ彼の武士の姓名を尋ねよとこそ宣へる折しも
 再び水音し先きなる駒についさんと淵き返すを恐れずに進める騎馬の
 勇ましき家光笑を含みつゝ待つ間程なく大丈夫の二人の名をぞ聞え上
 ぐ先きなる人は阿部豊後後なる駒は老黨の中にずくれし彈衛なり」

二 段

誠忠無二の大丈夫の心も惜しや通ぜざるいたましきこと昔より「數のた
 めしはあるなるれ、阿部の早瀬に乗り入れて武士の鑑といましめ人の
 眠りを攪したる阿部の豊後忠秋は去年の春より將軍の勘氣を受けし事
 あるが、忠秋の潔よき心に君の勤を助けまいらせんものとおもひし
 も事も水の泡不興を蒙る是非なさも日々の出仕は怠らず君の御爲と盡
 せども御言葉さへも只一度仰せられざるのみならず豊後を見ては顔を
 むけ例日も御氣色荒らかに變らせ給ふを見るにつけ斯ては近習に侍る
 さへ心苦しき限りとて自づと人にも疎まれつ光る黄金も時を得て益々
 深く土中に埋もるさまに似たる故今は生甲斐なきのみか心づくしもう
 たかたと消えて果敢なき浮世かな刀の手前武士の意地只深く腹切りて
 吾まごころを君前に聞え上げんと幾度か思ふ心を老臣の平田彈衛に

止められ、勵まされては自らも、思ひ返しつながらへど、去る菊月は菊の香の、武士の譽れの真心を、歌に咏じて奉る、多く侍べれる武士の中にも一人忠秋が、心の裡を將軍の、御感に入れど如何にせん、未だ忠秋の咏まれたる大和歌てう事をしも、しろしめさずやありつらん、誰ぞ咏まれしと御尋に、歌の主こそ阿部豊後、忠秋なりと近臣の、申上るに家光公、笑みまし賜まひしかんばせも、忽ち變りて御座を立つ、コハ如何にぞと老臣も、取つく島もなかりけり、豊後は獨り茫然と、寄る邊なきの捨小舟、もやいも絶えつかぢ、折れつ、浪のまに、漂ふは、武士の生し耻なるれ、思ひ極めて死なんづと今日や覺悟を死出の山、ヨシヤあの世に旅立つも、魂魄此土に止りて、君を守らん志、忠義の道は忘れじと、彈衛を呼びて事つばら、説きて靜に腹切らん、眞の武士の道をしも、踏みてや行かん西方に、頼むは彌陀の利劍より、

國と君とのことぶきは、幾千代かけて榮へませ、萬代かけてと祈りつ、今や誠は更になし老臣彈衛も、諫むべき、言の葉なけれど誠忠を、天も憐れと思しけん、平田彈衛が胸の内、浮み出でたる諫言、捨つべき命を長らへて、モシヤ大事と聞きしとき、馬前に於て潔く、腹切る事は如何にやと、涙片手に脱き出す、時しも三代將軍の、股肱の臣と頼まる、重き臣より添え言葉、ありしこととて忠秋も、死せしと思ふ覺悟せば、如何なる難き事あるも、耐へ忍ばれん事やある、死するの事は一旦に、易きことにはありつれど、生き長へて君前に、勳立つるは難きぞと、吾れと心をひるがへし是より後は影ながら、君の御身に恙がなく、御代太平に治まれと、祈るの外ぞなかりしが、數の月日を経るまゝに、變るは人の心なれと、變らず盡す忠臣の、心は天照大神の、しろしめしけん洪水は、幸か不幸か秋が、命を捨る晴の場と、修羅の巷

を欺ける。此大水に駒を入れ、君の自ら渡らんと、思ひつめたる一刹那、自ら一駒を乗入れり、水音たかく響きつゝ、主を思ふて生き死を、共に白髪のお武者が、死出の晴れとて畢生の勇氣をこせし駒のせな、大波なりと寄せば寄せ、逆捲く水勢も眼にはなし、命をまとの主と従は、ハヤ中央まで進みつゝ、此方の岸より眺むれば、浮きつ沈みつ沈みつ、浮きつ、アタラ勇士を水のため、一人ならず二人まで失ふことを口惜しき、扶けの船を出せよや、扶けの船をいざ早く早く、出せと君命の厚き仰をかしこみて、大船小船こき出せと、宛然似たり木葉船』

三段

駒を御するの術あるも、心にそれごとく悔みたる、
ければいかでかは、

な○ぎ○る○水○を○乗○切○り○て○彼○方○の○岸○に○達○す○べ○き○豊○後○は○死○す○る○の○覺○悟○な○り○彈○衛○
は○生○き○て○老○先○の○余○命○を○つ○が○ん○心○な○し○主○従○迭○に○言○は○ね○ど○も○死○す○る○の○外○は○
あ○ら○じ○ぞ○と○思○へ○ば○難○き○事○は○な○く○嬉○し○や○豊○後○は○漸○く○に○彼○方○の○岸○に○登○り○け○
り○疲○れ○し○駒○を○いた○は○り○て○後○の○方○を○見○返○れ○ば○只○我○の○み○と○思○ひ○し○に○續○け○る○
武○者○の○又○一○騎○續○け○る○武○者○は○誰○な○る○ぞ○ゆ○か○し○き○名○を○ば○尋○ぬ○ん○と○近○く○ま○
に○よ○く○見○れ○ば○老○臣○平○田○彈○衛○な○り○老○の○氣○丈○に○忠○秋○が○先○途○を○見○ん○と○て○續○き○
し○が○吾○が○身○を○大○事○と○主○と○従○の○三○世○の○縁○あ○る○ぞ○と○は○彼○が○如○き○を○言○な○ら○め○
持○つ○べ○き○も○の○は○忠○臣○と○己○が○心○に○た○く○ら○べ○つ○思○は○ず○知○ら○ず○大○丈○夫○が○落○す○
涙○ぞ○い○ぢ○ら○し○、彈○衛○は○や○が○て○陸○を○指○し○上○り○て○豊○後○忠○秋○の○御○前○に○頭○を○う○
な○だ○れ○つ○物○言○ひ○た○げ○に○見○ゆ○め○れ○ど○先○き○立○つ○老○の○涙○こ○そ○問○は○て○も○著○し○忠○
秋○が○目○出○度○早○瀬○を○乗○り○切○り○し○祝○さ○い○ふ○に○ぞ○あ○り○し○なる○忠○秋○彈○衛○が○手○を○

取りて、暫し言葉もあらざれど、彼方を信と見返れば、將軍始め近習等の扇を揚げて、乗り返せ再び駒を乗り入れて、此方の岸に來れよと、いへるが如き様なりき、此事見たる主従はいかていかてためらはん、死するは素より覺悟なり、駒も疲れて見ゆれども、哀れや主が亡き命、覺悟しつるを悟りてん、水勢を恐れずあやなせるまゝにぞ向ふ嬉れしさと、駒のたてがみかいたて、再び彼方に渡らんと、人に物言ふ如くにて諭せば、駒もいばえつゝ、勇氣を示すに似たりけり、さらばと言ひて見返りつ、續けや彈衛鏝石の矢竹心の徹らざる、試は未だ聞かざるぞ、只傷しきは老先の、短きいましを苦めて、予と生死を共にする、此事のみぞ悲しかる、救せよ彈衛としばたいく、涙を臉にはらひつゝ、言へば彈衛は、殊更に、主を勵ます言の葉は、猛く聞をと自らは、嬉しき今はの仰をば、いかていかて忘れじと語りし末は涙

なり、彼方の岸には此事を知るや知らずや招きつゝ、扇を揚げて呼ぶさまは、歸り來れと聞えけり、必死の覺悟にいざ彈衛續けと鞭を揚げれば、應と彈衛も諸聲を合せて川に乗り入れり、將軍之を見そなはし、二つの駒をかり入れし、彼等勇士の心こそ、必ず死なん覺悟なれ、助けの船はあらざるか、先に出せし船人は、如何にやしけん、ちりくと言ひ甲斐なくも流され、命の瀬戸際束の間の、爲めにはならじ今一度、船こぎ出せとくとくとくと、烈しき下知に舟人は、必死と川瀬を横りて、豊後が駒に寄せにけり、上意に候此船に、乗りて彼方に渡られよ、上意なるぞよ、呼べば忠秋見返りて、彈衛にそれと目くばせし、尊き上意にありつれど、馬上に河を横切らん、覺悟を今更ひるがへす、これぞ誠のもの、のふの、身を終るまではづかし、彼方に渡りて恙なき、運命あらば其時に、厚き情に報ひなん、只此儘にと主従は、

遙かの下手を打渡り、難なく陸に上りけり、主従共に恙なく、左れども彼は倒れたり、嬉しさあまり黒金の心もゆるみし故なるか、倒れたれども介抱の厚き醫師に扶けられ、彈衛諸共君前に進み出でけり、目出度も君も豊後が忠心を嬉しき事に思されつ、數の月日をすけなくも、困しめたりしいたはしさ、今日の手柄をまのあたり、しろしめしたる將軍は、心の誠目に涙、誠の武士と後の世に傳へらるべき忠臣が、阿部豊後守忠秋と平田彈衛の主従ぞ、斯くまで赤きまごゝろを、盡さんものとの忠臣は、類ひまれなれ五万石、武士の鑑と給りて、彈衛も厚き御言葉を、陪身ながらも下しけり、其いさほしは今の世も、駒止橋と名も高く、往きかふ人も古を、思ひ出でつゝ忍ばれん。」

琵琶歌獨吟集終

明治三十八年十月十日印刷

全三十八年十月十四日發行

《正價金貳拾五錢》

著者 後藤青蝸

發行者 大草常章

印刷者 多田三彌

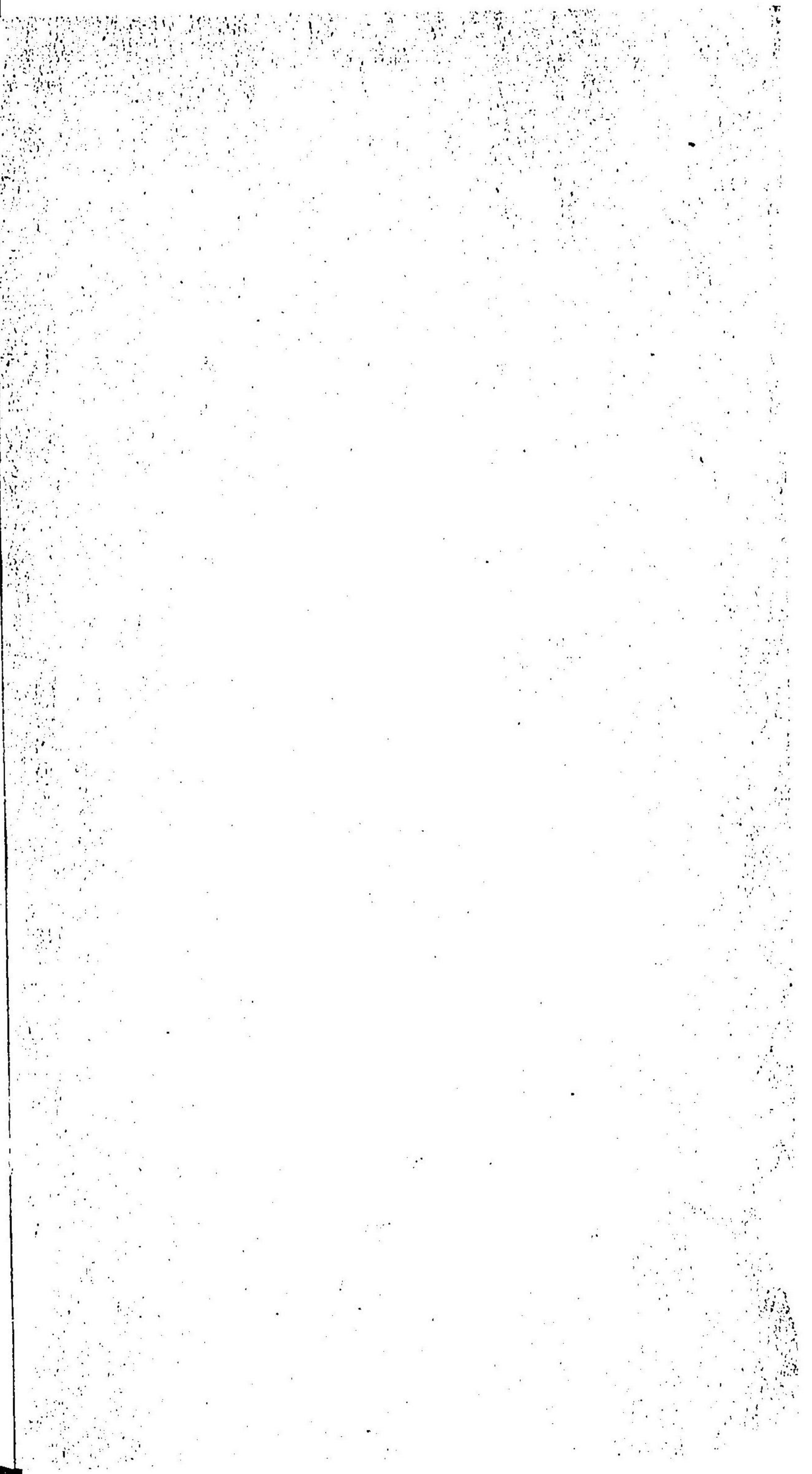
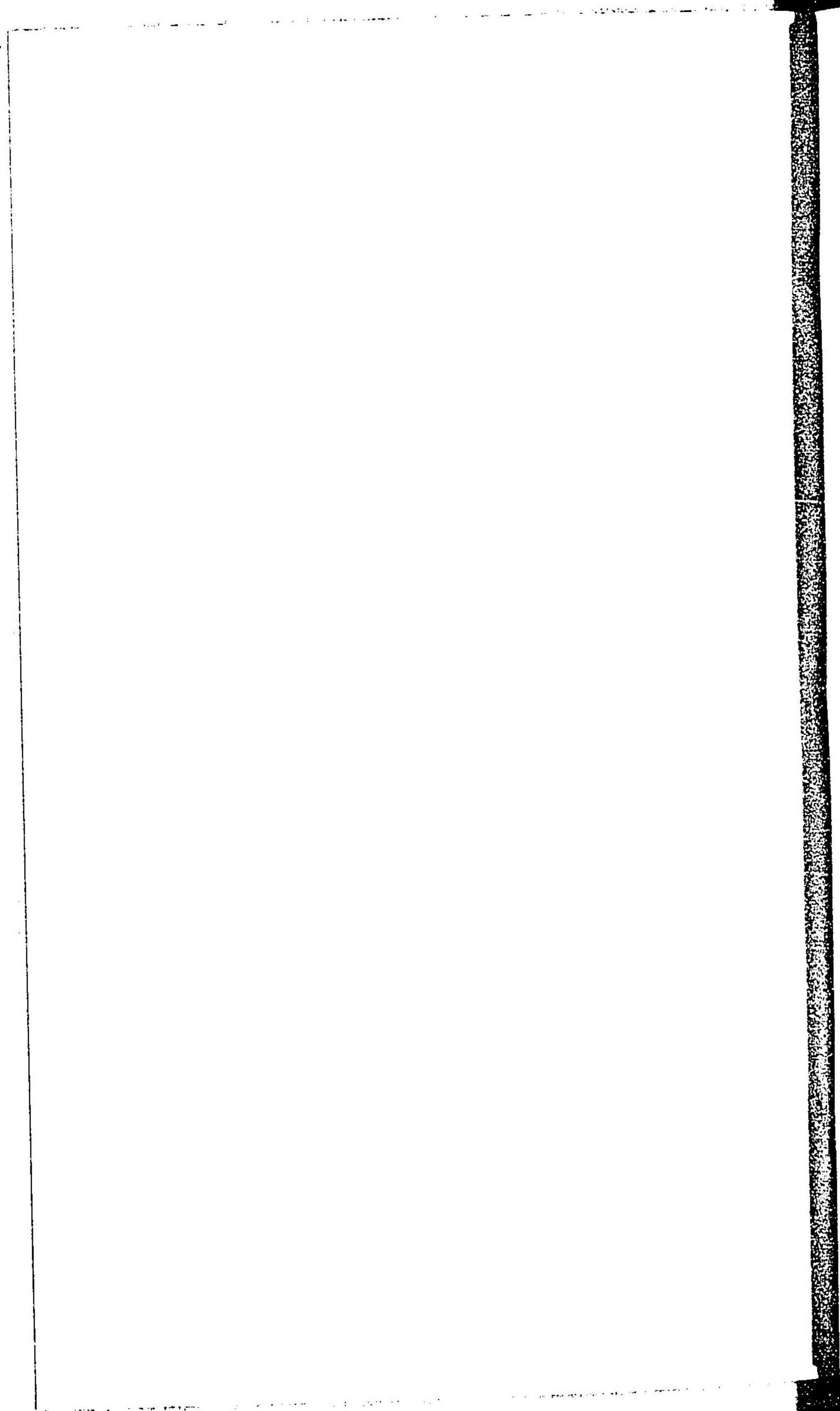
印刷所 惠愛堂

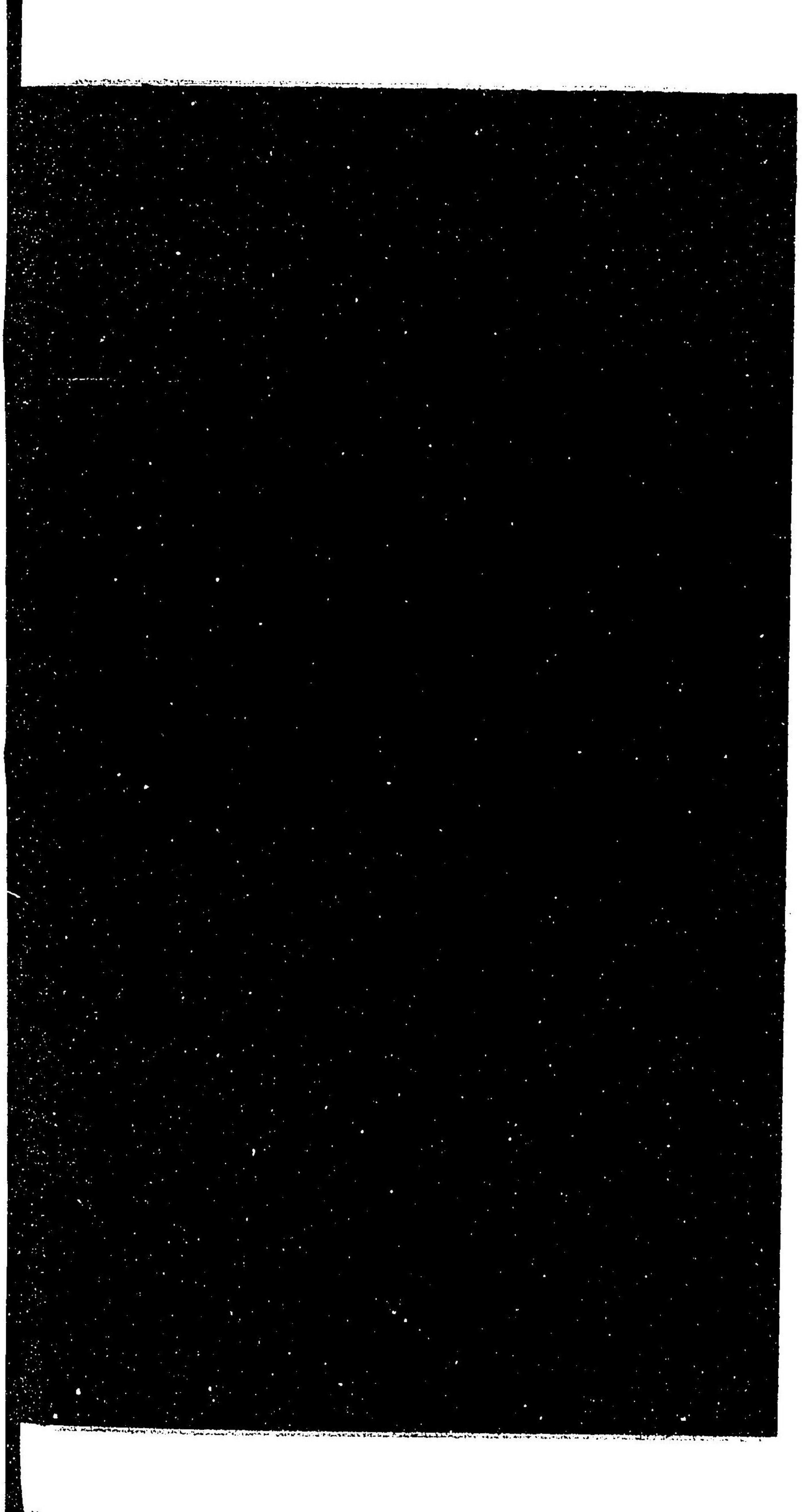


發行所

東京市神田區錦町一丁目十番地

松榮堂書店





特22

650

琵琶歌独吟集

国立国会図書館

074728-000-6

特22-650

琵琶歌独吟集

後藤 青蝸 / 編

M38

CEJ-0324

